

野口雨情終焉の地 羽黒山麓雨情旧居

宇都宮伝統文化連絡協議会長 柏村 祐司



雨情旧居敷地内に立つ「童心馬像」
「あの町この町」の詩が刻まれている



雨情旧居・道路拓幅で向きを変えた

鹿沼街道と宇都宮環状線の交差する陸橋を「雨情陸橋」という。この近くに野口雨情の旧居があるからである。

野口雨情といえは「シャボン玉」や「七つの子」「あの町この町」等の作者であり、北原白秋、西条八十と並ぶ童謡三大作者の一人である。また、大正期頃から本格化した日本の流行歌の基盤をなした人でもある。

野口雨情は、明治十五年（一八八二）北茨城市磯原に、廻船問屋を営む名家の長男として生まれる。本名を英吉という。東京専門学校（現早稲田大学）に入学するが、家業の都合で中退。明治三十七年一月には村長在職中の父が突然死亡。磯原に呼び戻され、その秋二十二歳の若さで旧家を守るために喜連川の資産家高塩家の娘ヒロと結婚する。やがて子どもが生まれるが、もともと気の進ま

ない話で後年破綻してしまふ。大正四年春、妻ヒロと協議離婚。大正六年十月、福島県いわき市湯本の芸妓置屋柏屋の女将と同棲。翌、大正七年、湯本を去り、水戸で旅館を経営する中里家の長女つると結婚するのである。雨情三十六歳、つると十五歳。つるとは雨情のよき理解者であり、理想の女性を伴侶とした雨情は、以前にもまして創作活動に励むのであった。

水戸から東京へ居を移した雨情は、大正十年「船頭小唄」（原題「枯れすすき」）を「新作小唄」に発表。以後、児童雑誌「金の船」（のち「金の星」）等に次々と作品を発表し、民謡、童謡の作詞家として知られるようになる。

月宇都宮の知人の紹介で、宇都宮市鶴田の羽黒山麓に疎開するのである。雨情が鶴田の羽黒山麓の地を選んだことについて、平野光三著「野口雨情」（雄山閣）に、「つる夫人の父である中里九二郎が、水戸から宇都宮に移り、当時、鹿沼に在住していたので、雨情一家のために此処をさがし出したのだ」とある。新天地は結構広く、家屋敷の他に畑が一町四反歩、水田が三反歩あり、畑には柿木数百本とイチゴ畑があったという。家族八人が暮らすには、結構な広さの土地で食料の生産も何とかなうたに違いない。母屋は間口が六間、奥行四間、建坪二十四坪。ここに雨情夫婦と子ども六人が住んだのである。

雨情の羽黒山麓での生活は、やっと歩ける状態で、田畑の耕作は使用人に任せ、創作活動もほとんどできない状態であったという。そんな不遇な体をおしながらの暮らしにやがて終焉の時がやってきた。昭和二十年一月二十七日、敗戦間近、新しい世の到来を知ることなく六十四歳の生涯を静かに閉じたのである。

雨情の羽黒山麓での暮らしは、約一年間と短いものであったが、自然に恵まれ、田園風景が広がる閑静な羽黒山麓の地は、土の香りを愛し田園詩人たらしめた雨情にとって、終の住処に相応しい所ではなかったろうか。決して立派とはいえない、むしろ有名人の住居にしては質素な雨情旧居に、雨情の控えめな人柄が偲ばれる。